

令和六年（二〇二四）三月二十六日発行  
『大倉山論集』 第七十輯 抜刷  
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

史料翻刻 木下韓村日記  
（十）  
—  
④

木下韓村日記研究会

史料翻刻 木下韓村日記 (十) — ④

木下韓村日記研究会

〔凡例〕

本稿では、なるべく原文通りに翻刻することを原則とした。

一 漢字は、原文通りとする。したがって、正字体(旧字)と俗字体(新字)とが混在している場合がある。

(例 詩會・詩会、託摩・託摩など)

一 異体字も原文のままとした。(例 昏(紙)、碁(棋)、畧(略)、船(船)、𠂔(部)、羣(群)、徃(往)、蕪(蘇)、出(出) 𠂔(事)、杫(杉)など)。ただし、パソコンで表現できない異体字は、通行の字体を使用した。

一 助詞の「者、江、而、ニ」は、そのままとし、他の変体仮名は、通行の平仮名を使用する。「江」、「者」はポイントを小さく、「而」「ニ」はそのままとした。

一 合字の「ㄱ(より)」「メ(しめ)」は、そのままとし、それ以外は、仮名を使用した。

一 不明箇所は、その文字数分□と表記した。また、その文字が推測できる場合は、傍注を加えた。なお、虫損などで文字は判読できないが、地名や人名などで推

測がつかう場合は文字を当て嵌めたり、傍注を付したりした。翻刻不可能な箇所でも文字数が推測できる場合は「□」、文字数が不明の場合は「(以下数字破損)」と表記した。

一 欠字・平出も原文通りとした。

一 読みやすさを考慮して、適宜読点および並列点を付した。

一 原文は、日付のあとにすぐに本文が始まるが、翻刻では日付のあとは改行して本文を記した。これは、読みやすさのためと初期の巻の形態を踏襲しているためである。

一 本文の補足情報を「」で傍注として付した。なお人名には役職をできるだけ付したが、姓のみが記されている場合は、紙幅の関係上、名を付すのみに留めた。

一 抹消部分は削除し、翻刻には反映させなかった。

〔安政二年〕  
嘉永八年

正月

朔旦

晴、麻上下着、朝四ツ前出仕、四ツ過分御禮初り、七人宛御禮、御番方七番迄一切、八番分士席之分一切、七ツ過相濟

廻勤之儀、追々御達之趣も有之、此砌之事二付、御家老中支配頭迄廻勤いたし候との御觸有之候二付、兩御寺御老職中支配頭迄廻勤

二日

東御寺參詣、支配頭打廻り、縁家・師家廻勤

三日

健宮村ニ清原〔元所々目付〕小左衛門を尋、夜二入帰ル

四日

出初、麻上下着、四ツ前出、於講堂惣教衆挨拶有之、句

讀齋にて御髮斗頂戴

五日

菊池行、村田江立寄、暮方旧村江着、下人彦藏召連

六日

隈府中野瀬等、縁家打廻り、夜福島会所江滞留

七日

平山を尋、弥〔城野〕三次同道にて今村之様帰り、礼八〔徳水〕も来ル

八日

終日雨天、新宅にて閑話詩作、夜礼八〔徳水〕・弥〔城野〕三次同宿

九日

帰府

十日

近邊年禮

十一日

雨天、同様 ○福島大太郎・下山大二郎・谷口萬次江兩  
助教〔門生〕込達紙面参ル  
右之面々暮迄二出揃、夫々相渡、柏木江御請二遣候事〔文行衛門〕

十二日

夕方より大城家江参ル、福島龜之允〔河原手水惣庄屋〕・犬塚伊之助罷越、  
其外三村・漆島等八支二有之、山隈新左衛門参る、年杯〔依佐助〕  
也、主人方二ハ筑山・山内見ユル、夜雪〔天津手水惣庄屋〕

十三日

朝五ツ過出勤、麻上下也、開講、當点、聴衆之儀、正月  
四日ニ開講相濟居候へハ、平服二候へども、當年ハ四日  
御開講無之候二付、今日皆上下也 ○講前御申渡有之  
面々名前書附置、出方一々相記し、病中有之ハ早速教授

局江相届申候事 ○説邊伯玉使人於孔子一章、朽木總教〔内匠〕

坐班、講畢而後申渡、音楽有之、八ツ比相濟候上師役中

講堂江兩方江例之如ク列坐、執政挨拶取遣不殘御酒・餅頂

戴、七ツ比引取 ○夜分木下初太郎父子・光永四兵衛〔前関手水惣庄屋〕・

三村傳之助・竹崎律次郎・福島龜之丞〔阿蘇郡西原村布田で開塾〕・衛藤七弥太〔高田手水惣庄屋〕

参る、平川貞四郎醉後來飲〔居寮世話役〕

十四日

御寺参拜、其後在宿

十五日

出初、教授局今先達而遣置候宮川一件見込書、返渡二相  
成、一ケ所名前違有を改、追而差出候様

十六日

出勤、二丸、但し平常之通ニ而出申候處、御始會二付上  
下着仕候様、漆島甚次郎服を借り罷出、頂戴有之〔元穿鑿役〕 ○

高橋弥平下着〔嘉永二年時、時習館会盛進〕

十七日

宅文會、昨晚丑三郎・宇一ヲ連出府、今日帰ル ○同

役夕山口先生〔九郎〕江柏木も被參候事ニ付參候様通達仕候二付、

夕方罷越候得者、宮川一件見込書、両助教とも二被見由、

一ト通り致披見、両方とも二大畧同説ニテ、学校中自分

計別説ニ有之候、自分見込書当席ニテ差出申候事

十八日

講釈當点、水哉ノ章ヲ説ク、帰候而齋藤寿三郎頼之書

畫帖序清写、夕方塾生年杯

十九日

出勤 ○吉村庄太郎出候而隱居家督願書相談、相認候而、

自身神足浅右衛門〔横山藤左衛門組カ〕江持参いたし候事

廿日

對 岳楼〔韓村遠極乾對錄撰記〕記 浄書、夕番後、飯田熊之助招飲、柏木并

同役佐野・三苦列也 ○信十郎・高橋 弥平相連〔文右衛門〕レ、

長嶋先生〔江入門〕

廿一日

當番 ○神足浅右衛門〔嘉永二年時、時習館買合談連、庄太郎〕夕吉村稽古附仕直し申来居申候

夏ニ認直、今夕持参、小太郎出府〔韓村也〕

廿二日

廿三日

小太郎帰ル ○九ツ過二丸出、加々山一同也、夕方夕

宇野市郎右衛門招飲、加々山同道也、但市郎右衛門、来

月七日・八日之比出府發足、此夜鎌田隱居・和田権五〔権内〕

郎・内山某同坐

廿四日

夕番、直熊殿會讀、断申来〔看吉〕

廿五日

並、安政と改元有之、當年八第二年ニ相成候事

廿六日

二九御會讀

廿七日

並

廿八日

並

廿九日

夕番、有吉家會

(安政二年)  
二月

朔日

大多尾兔狩、塾生十六人連

二日

並、夜分(釋子)信十郎召連、高橋(弥四郎)方離杯

三日

今日夕講堂御繕二付休学 ○同役中講藝齋二打寄、昨年調残諸生名録并別達等相調

四日

右同、高橋(彌村先美)弥四郎、江戸被仰付出立

五日

右同、調方今日迄ニ相濟

六日

右同、御二方(細川藤順)様御會日之處、矢護山御狩御出ニ付、御延引之段申来 ○今日夕在宿、宅會をいたし候

七日

廣丁市買糞及桂三株、縁家年酒、客益田・木村・寺島来

訪

昨夜九ツ比致病死候段、(辨村弟)丑三郎今申越

十三日

八日

夕方有吉家會

十四日

十五日

九日

江戸下り御用有等打廻り

(辨村子)信十郎并塾生両三輩召連、緑川江小鮎釣

十六日

今日(皇助)今井口申談、當番請持、教授局江出

十日

(上田忠左衛門之)上田忠至、(魏源撰、一四卷)讀聖武記

十七日

(推内)加々山方文會、出席

右同

十一日

十八日

十二日

朝飯後、(玄卿)町野塾生之儀、(太郎右衛門之)大城方晰合 ○菊池今村彦四郎

教局今呼ニ參候付、総教衆文藝見分可有之哉之儀ニ付、(興兵衛)噂之儀有之候ニ付、築瀬申談、明日集會之筈



十九日

前記之通候(カ)コト私宅打寄、尤去年御上下拝領仕候、初而請持候二付、御祝之酒を用ル、両助教ハ支有之

廿日

前記之儀申談之趣、教局江申出置候

廿一日

(十平)上野・真野(謙助)・池邊(宮門)・澤村同道、真野別荘ニ遊ヒ圍棋、(陽置館句読師)益田源七来、夜帰

廿二日

昨日八ツ後、御用有之、(鹽崎 中村加善妻の兄)上村彦次郎、笠格兵衛一件二付、御次勤被成御免、往々不被 召仕旨被 仰渡候由、笠喜左衛門ハ御擬作被 召上、御中小姓被 仰付、格兵衛ヲ當月四日、浦賀於御備場刎首被 仰付候由傳聞(同生新兵衛義父)一、辰次郎申立之儀二付、昨日山中平左衛門江罷越、書

附返候事

一、彦次(上村彦次郎)被仰渡之趣左之通

其方儀、江戸江相詰居候内、去年八月八日之夕、笠格兵衛御家中小者躰ニ而竊ニ御小屋江忍參、筒井格之助を及殺害、御陣屋致逐電、他所奉公をも致候段申出候ハ、重科之者二付、如何様卒取計之筋も可有之處、姑息之情ニ流シ、其座相當之處分も無之差返、追而被召捕候様成行、不束之至二付、御次勤被差除、被下置候御扶持方被 召上、往々不被 召仕旨被 仰出之

廿三日

(鹽崎 中村加善妻の兄)上村彦次郎見舞、朝飯後(河原手水徳住屋)福島龜之允同道、菊池江罷越、夕方着

廿四日

(福島)龜之允相誘、土豊水村上ニ而高山謙(蘭庵)太攻軍筒打方致候ニ付見物仕、瀧之様罷越、暮方会所ニ而徳永礼(頼村妹の夫)八来会、同道旧村江引取、礼八止宿 ○是夜氏社(頼村惣)丑三郎其外參籠いたし候二付、手前も參詣

廿五日

昼後牙痛起ル、(釋村從兄弟)新之丞列、河原ニ於而小酌相催、夜分  
(釋村の遠縁)田尻平三郎宅江相越圍棋

廿六日

昼比迄新宅江罷在、又々平三郎江相越居候處、熊本今人  
(釋村門人、龜之系子)指立、福島大太郎紙面ニテ、講堂御繕濟寄候而、来ル廿  
八日今講釈等相初候段申越

廿七日

(釋村の從兄弟)新之丞、長左衛門木下永田山堺并野水吐切廣之畑山等數ヶ条  
出入有之、双方熟和二至り兼、上達ニ決居候ニ付、(釋村從兄弟)新之丞  
ニ啣合之儀有之、同道ニ而論所等見繕、村方も篤卜了簡  
いたし、(釋村從兄弟)新之丞も同様ニテ、長左衛門書面之趣御取省、  
双方無事ニ致し、御山藪堺之儀ハ追而御改之節片付可申、  
論所ニテ持出之儀御止メ被置申候、尤當坐ニ納得ニ至り  
不申末ハ、(釋村弟)丑三郎、半右衛門江申談置候

一、平山源作参り、貞五郎養子縁組願一件啣合、源作向

方江此節之返答、何とも不得意趣申向、此方今此上存  
寄ハ無御坐筈之事

小昼今打立帰府、途中ニテ雨至、七ツ半比着、(講堂世話役)佐村巳  
三郎兼而之約束ニ応し参り、同僚會飲

但此節在郷江參候ニ付而ハ、廿三日二丸之御詩會・  
廿六日御會共ニ御附役江御断申出、廿三日ハ加々山  
代勤いたし呉候、廿四日有吉殿、廿六日小笠原(備前)殿定

日ニ付、共ニ紙面を以断申遣候

廿八日

出勤、来月十五日比今御家老衆見分相始候筈

廿九日

夕番後、有吉家會分松崎次兵衛招ニ応シ罷越  
(船田詮問郡代)

卅日

(釋村同生、狩野文之進の父)狩野俊助、御留主居御中小姓被 召出候ニ付為歡、  
本家狩野喜覚方江罷越  
(喜角)

三月 〔安政二年〕

朔日

朝之内上村彦次郎を尋而、〔玄雅〕町野二而圍棋

二日

見分調、夕番迄相勤

一、二丸廿三日之御詩会、廿四日ニ御替日ニ相成候段、

〔權内〕加々山々噂有之候

三日

〔大組付め〕右田才助方江内話有之罷越候、近邊佳節礼、〔熊之助〕飯田病中見

舞

四日

五日

宅詩会、八ツ後、〔備前〕小笠原家約束之日取ニ付、八ツ過罷越、

〔小笠原〕備前殿も被逢、論語會ニ定り、会后酒飯等出候而、暮

方引取

六日

二丸出後、講堂文会例之通、〔彦助〕帰りニ永鳥〔源七〕益田同道、圍棋、

暮比引取、菊池両家内出府、〔權村七〕信十郎も帰ル

七日

〔熊之助〕飯田引入ニ付、夕番迄相勤ル

八日

夕番後有吉家会 ○試業御達ニ相成、十五日ヨリ

九日

早出、早引、菊池家内共ニ連れ、〔多茂子〕水前寺出浮 ○〔有吉〕市郎兵

衛殿江立寄、借用之一冊返ス

十日

詩会、宅請持、〔權村別〕宇一風邪氣味

十一日

〔辨村甥〕  
宇一風邪氣二付、下人徳右衛門菊池江返ス

十七日

試三日目 ○夕方小笠原家会

十二日

〔辨村甥〕  
宇一昨日夕下し候二付、迎二案駄〔宿與之〕を為釣候様、貞七遣

十八日

試四日目

申越

十三日

夕番、有吉家会、宇一其外〔辨村子〕信十郎も菊池江参る

試止

十九日

廿日

十四日

試五日目

十五日

試業始、文科

廿一日

試六日目

十六日

試業二日目、詩科

廿二日

試七日目

廿三日

試八日目

廿九日

試十二日目、有吉家会

廿四日

試止、二丸御詩会、出勤

四月〔安政二年〕

朔日

廿五日

試九日目

試十三日目

二日

廿六日

試十日目、二丸分出勤、夕方小笠原家会

試十四日目

三日

廿七日

試止

試十五日目

四日

廿八日

試十一日目、〔息野〕安井仲平〔江〕状仕出ス

御寄合二付、試業休

五日

試業十六日目、小笠原家会

六日

同、十七日目

七日

同、十八日目、加々山一同、夜分上田忠左衛門案内

八日

同、十九日目、有吉家会

御着前二付、先今日迄二試業暫置置二相成候

一、四月九日

休、去ル七日森尾廉三郎二男森尾龍彦と申者、片山受持之諸生二而、講釈體を失候二付、今朝呼寄及教諭

十日

同様休、上田忠左衛門来、讀聖武記

休

十一日

十二日

今日今講堂獨看、如例出勤

宮川安藤一件、訓導中両議二相成居、見込書出相達置候

處、自身差出候書附ハ其俣ニ有之、外之同役并教局見込

書二駁議付キ候而、去ル朔日比教授局江申来候由

飯田熊之助、試業前今引入居候

十三日

並、夕番、有吉家会

十四日

朝ノ内参拜、屋根替、夕番

十五日

休、屋根替濟 ○柿原墓参 ○高橋浦賀状至

十六日

晴、(細川齊藤) 太守様先月七日、江戸 御発駕、東海道・山崎越・

中國路被為遊

御通行、今日植木夕被遊

御着候二付、辻御目見、御杭場(江)罷出、直二廻り方如例

十七日

於加々山宅文會後、小笠原家会、其跡(小笠原)ニて民部殿同道、

井芹別荘ニ罷越、暮比引取

十八日

十九日

廿日

廿一日

講堂 御入、如式召出有之、昼比相濟引取之上、八ツ比

夕菊池ニ罷越、暮過着

廿二日

近村所々打廻り、小太郎新宅(江)休、暇日

廿三日

同様、日向書生長光太郎至、暇日

廿四日

早朝打立、昼比着、八ツ比夕二丸御詩会出勤

廿五日

千原瑞巖寺ニ於て詩文会

廿六日

二丸出勤、講堂夕番、小笠原家会

廿七日

廿八日

〔蘭痴〕  
高山謙太至、評對岳樓詩

四日

夜雷

廿九日

夕番後、有吉家會、〔釋村宅〕小太郎至、〔釋村宅〕信十郎一同帰ル

五日

〔番方組職〕  
荻角兵衛、甲祝ニ罷越、尤 御禮後一往帰宅之上ニ候事

五月

朔日

〔安政二年〕

下総人古矢某至、飯沼ノ人也、〔吉田藩上中村封豊長男乾齋と次男川西兩州〕中井乾齋兄弟の事ニ及ぶ

六日

二丸御會御延引之段申來候、講堂出勤

七日

飯田助、夕番、明日

御入ニ付、八ツ限休学

岩國劍客兩人至

八日

御入、〔呈助〕井口講孟子、諸生三座、荒木哲次・田中三郎左衛門・真野豊彦

三日

操出、夜雷、近所ハ藪ノ内渡下・松山方氏家氏屋敷中ニ

落ル

八ツ後、有吉家會 〔釋村後妻多茂子の父〕○吉村喜兵衛父子御用狀願、〔中小姓頭〕吉田閣

之助方分手許 〔江〕被遣候間、出府所者 〔江〕申付差立之



九日

十四日

雨降續、無人ニテ御寺不參

十日

宅詩會 ○吉村庄太郎昨夕出

十五日

井口同〔呈地〕道、是法隱宅江參、夜歸

十一日

暇日、吉太郎御殿江出、父喜兵衛名代手前罷出、喜兵衛

十六日

病氣ニ相成候付隱居被 仰付、庄太郎儀御中小姓被 召

二丸御會

出、父江被下置候御合力米、御扶持方無相違被下置旨被

仰渡 ○今夜手数相仕舞、庄太郎引取、喜兵衛名代ハ

十七日

同道之人夕御辭令給ニ相成候迄也

宅文會、夕方小笠原家會

十二日

十八日

並之通

並

十三日

十九日

夕番、有吉家會

並

廿日

並

廿六日

二丸御定日之處、水傷下痢いたし候二付、御断申出、小笠原家會も同様申遣候事 ○此日不快届

廿一日

並

廿七日

出勤

廿二日

並

御奉公附

私儀、時習館訓導被 仰付置、去寅六月朔日今當卯

五月晦日迄、當前之御奉公相勤候内、病中二而日数

八日不参仕候

廿三日

説經、夕方御寺参拜、有吉家會 ○路次山室宗全〔外様医御勤役〕ヲ見ル、

曾テ参候返礼旁、三彦事断置

一、両教家塾生之儀、致世話候様被 仰付置、致世話居申候

一、澄之助様〔細川護久〕

寛五郎様御會讀申上候様、去六月二日御用人中〔細川護明〕ノ

御達ニ相成、御定日之通罷出申候

出勤後、二丸御詩會

一、数年出精相勤候二付、去閏七月四日御紋附御上下

廿五日

法念寺郊外詩文會、帰路飯田〔熊之助〕・佐村〔大石南門〕ヲ訪フ

一、當年五十一歳罷成申候

一具被下置候

右之通御坐候、以上

安政二年六月

木下真太郎印判

真野・小山・上野三殿當

五月廿八日

暇日いたし、上田久兵衛と聖武記讀合

同廿九日

吉村庄太郎父子来ル朔日御禮之達、神足浅右衛門〔中小姓二番組〕分通達

申来候間、出府所之者、夕方分差立ル ○河方半四郎〔鉄砲二十挺懸〕

野村佐一右衛門、真野方江歛ニ参ル

同卅日

致暇日、久兵衛同讀聖武記畢ル、吉村庄太郎出府、

隠居喜兵衛病氣ニ付名代手前罷出候段、彼頭宅江相届候

〔安政二年〕  
六月

朔日

五半時庄太郎同道出仕、書拔御礼ニテ、九ツ前濟引取

一、日本史書写造端、塾生三拾老人、出来三百七〔ツマ〕ツ餘枚

二日

例轉升生拾七人受持

一、去ル廿八日教授局分紙面参、去ル廿四日旅生届達之

内、益田新三郎儀ハ先頃月首四日ニ相達、重々之儀申

来候ニ付、廿九日夫々仕直ス、以来ハ通帳ニテ付出可

申筈

三日

四日

五日

加々山宅詩会、夕方小笠原

六日

二丸、講堂文会、おひさ至ル ○入暑 ○立田山墓所手入

佐村又之允同〔佐村〕巳三郎御用隠居家督、案内二付参ル、此夜電光

七日

立田山墓手入、貞七〔東姓〕兩日共二人壺人雇

十二日

夕方有吉家会

八日

千田村〔山鹿市鹿央町〕江貞七を使ス

十四日

妙解寺参拜 ○〔禪村先妻実家〕藪ノ内家内案内二付、皆参ル、夜自身も同様

九日

南岳丁火事、所々飛火いたす、乳母宅懸付、北野隆右衛門宅同様 ○〔時習館訓導〕佐の亥一郎・築瀬〔東姓〕騏兵衛近火二付見舞

十五日

〔野尻手水徳庄屋〕渡子八郎至、阿蘓郷学ノ事を談スル、昼之内上村〔渡部〕江罷出、子八郎旅宿を尋ル

十日

〔権内〕加々山宅詩会

十六日

十一日

二丸

六月十七日

〔權内〕  
加々山文會受持之處、病人二付、手前二受持

廿四日

二丸御詩會

十八日

廿五日

砂鳥高見氏別業詩文會 ○吉田潤〔中小雄題〕之助方招二付罷越、夜

十九日

帰

廿日

廿六日

二丸

廿一日

廿七日

小笠原、徳太郎〔權村弟〕夜引取 ○辛嶋多喜次訓導當分被 仰付

〔權村弟〕  
廿二日  
丑三郎至 ○徳太郎〔權村弟〕至

候

廿三日

廿八日

宮川一件二付、教授局夕咄之儀有之、別二録置 ○今日

宮川一件二付、築瀬方〔殿兵衛〕參會、別録

有吉家断申付 ○右田喜十郎・西徳太郎至

廿九日

有吉家会、石井一同也、先二引取

五日

詩会、小笠原

晦  
小太郎至〔釋村弟〕

六日

二丸

七月〔安政二年〕

朔日

七日

立田山募手入仕舞 ○日本史書写、二度目 ○宮川一件

夕方高橋〔嘉永二年時、時習館會説述〕、舟遊を催ス

二付、築瀬方打寄、別録〔職兵衛〕

八日

有吉家会

同二日  
不快、引入、辛嶋〔多喜次〕今日今夕出勤

九日

同三日

不快、引入、小太郎帰宅〔釋村弟〕

十日

宅詩会 ○夕方中津海同道、法念寺〔平之進元〕江罷越、和尚二話ス、

四日ヨリ出勤

前月廿五日之末なり

十一日

宮川一件二付、〔撰兵衛〕築瀬方江打寄、〔多喜次〕辛嶋初而加り

十二日

十三日

有吉家会讀在郷江打立候二付斷、尤天氣見合候事

十四日

朝飯後打立、菊池江罷越、昼過村田江着、夕方旧家ニ至ル

十五日

涪灘先生・〔浪江忠次〕黃華山人墓參、〔兼室黃華〕桑満師を訪、〔伯順〕噺子場之様參

り見物、畢而城野〔輝村從弟城野靜軒の母〕從母病氣見舞、福島之様參り、

暮候而今村之様引取

十六日

雨天二付、〔輝村宅〕小太郎宅ニ滞、暇日

十七日

曉ニ帰宅、直ニ宅文会請持、夕方宮川一件二付、〔呈助〕井口方

打寄、〔撰兵衛〕築瀬・〔井口呈助〕主人・〔權内〕加々山・〔多喜次〕辛嶋・自身也、論説不合

十八日

講釈當點、〔藩子万章七〕象憂舜憂章

十九日

並

廿日

並 ○宮川一件、銘々存寄書附差出候様、昨日政府分申

来候由、書附築瀬分為見ニ相成〔撰兵衛〕

廿一日

並

廿二日

並

廿三日

並、見込書附、〔騷兵衛〕築瀬江遣候

並

廿四日

沙鳥高見氏別荘二而相催、〔多喜次〕辛嶋も至ル

廿六日

二丸、夕方小笠原

並

廿七日

廿八日

先日官府問合之末、兩教返答書草稿、〔新五郎〕築瀬分見セニ相成、書附之趣ハ一坐ニ而ハ通シ兼候

廿九日

暇日、

曉前雨晴、四ツ前分〔平之進力〕中津海至、塾生益田・首藤俊藏・〔辨村守〕真十郎、下人召連、寒火見物ニ罷越、〔郡兵衛並〕御船冬秀〔独礼医師〕悴仙守道分出合、〔辨村門生〕町野玄同も同道、都合八人、宇土ニ而松田三成宅ニ休ミ、〔三悦〕三越同道、暮而松はせニ至、〔御船〕仙寿世話ニて船を雇ひ、海上二里、松合ニ至ル、夜見鼎も至ル、後宅之楼ニて白縫見物仕、鶏鳴比、海上二行喰違候而漁火の如く相連り、向曉消ス、當年相應之出方之由

〔安政二年〕  
八月

朔日

命船三隅峡遊覽、直ニ松はせ〔橋〕迄還船、松山久保慶助〔久保桂助、松山手水惣庄〕官宅ニ宿ス



二日〔頭注〕 暇日

昼比出立、宇土草野團助を問、篠原・武藤諸生至会、

酒肴設ケ有之、團助供應甚至、七ツ半比逃酒而出、石丁

橋ニて日入、四ツ過帰宅

漁客艤船在水關、問余盪楫向何間、舍魚吾且取熊掌、可

見海南奇絶山

天草三國我外城、海回地裂峡島鳴、休咲吟酌問形勢、山

河近日愛書生 海游二首録于草野席上

三日

出勤

前遊二今一首あり、峰容面々闕天工、鸞鳳驚籠出不窮、

逢着衣冠大男子、屹然立脚急流中

四日

並

〔推内〕 加々山宅詩会、小笠原家會

六日

風邪二而引入、二丸御會御断申上候

七日

右同引入

八日

右同引入

九日

右同引入

宮川一件二付、兩教并築瀬列江度々政府今之間難有之、

打寄二相成候由

十日

二丸御二方様水前寺御茶屋江被 召連旨昨日御附役今申

五日

来候間、今朝指急キ罷越、四ツ比御出、終日御詩作、間ニ御綱山御上り等有之、夜ニ入御帰、御跡ニ而四ツ比帰宅〔澄之助寛五郎〕二公子餘計之御作有之、分題分韵等被仰付、愚作左之通

仙源別館俯清冷、鳥姿魚態与時寧、風鳴潭石真鉗鋸、山削芙蓉小洞庭、沙上路行晴雪白、松邊船御走龍青、尤是振麟仁厚化、比興洋々臨水聽

人語欣々聽不謹、羽旄夙駕度桑麻、鴻鳴鹿伏神靈囿、却醉木喬恭儉家、趣似泰山臨北海、游申朝儻到瑯琊、如今却笑非其樂、獨坐齋王誇雪花

此一首每句用孟子書中語

鎖鑰如君誰敢侵、終霄耿耿抱關門、積多不厭發時少、鱗介從來慈水深

右分賦水門

十一日  
出勤

十二日

出勤 ○福島大太郎小帰、脇差拵頼遣ス〔門生〕

十三日

夕番後、小笠原民部案内ニ付、友岡弥三石衛門、石井茂助〔時習館句読部〕同夕飾卸見物、夜ニ入帰ル、有吉家会ハ懸合候而、明日二成

一、先日水前寺ニて之詩、改書差出候様、去ル十一日二丸江御礼ニ出候節、鬼塚嘉太郎〔留守屋番方、番組方〕今申聞候付而清書仕、今日差出ス ○久留米生首藤俊藏〔門生〕、祖母を失候音信有之、今日今帰省、蓮池生水野〔候〕・鑰尼阿生来ル〔候〕

十四日

御寺々藤崎社參、直ニ夕番出勤、用事有之、有吉家会斷申遣候、深江謙藏〔門生、肥前家老多入長門家中〕去春江戸江出立前之書翰并今月十一日下り後之書翰一同相達、外ニ書物二封 ○諸富宗潤来候而高橋篤次書至〔門生〕

十五日

朝随兵二信十郎・小吉・おつるを連参る  
〔釋村子〕〔釋村娘〕

十六日

二丸出、御會後、御作拜見、直二小笠原家会 ○沼川世話〔敬心〕にて溝口家注疏二帙参ル

十七日

柏木去月廿三日より大躰引入二付見舞、加々山宅文會〔文右衛門〕〔権内〕  
○長崎英夷船八艘二相成、跡舟二艘、外二總督之船参候筈、情状ハ墨同様、商館願取候存意なるべし ○溝口殿留守古田瀬兵衛〔藏心〕の世話にて、周官義疏五冊借用、彼〔藏心〕為持遣又

十八日

並、築瀬講釈〔藏兵衛〕

十九日

並、兩助教出方無之二付、講堂詩会なし ○二丸〔山口仁九郎〕江御題

上ル、登阿蘇山・送人游鎌倉 ○水前寺之作改書、併而

差出 ○夕方、辛嶋〔多喜次〕ヲ問フ

廿日

夕番、並之通

廿一日

當番、並之通、月田鍊太郎出候二付、辛嶋〔多喜次〕分噲二付、暮

方彼方江罷越、水津先〔熊太郎〕□在 ○飯田熊之助不幸知らせ

二相成居、吊儀失念、今日参ル

廿二日

當番、夕方水津宅江〔熊太郎〕、辛島〔多喜次〕・月田参ル、約會至夜〔熊太郎〕

卯八月廿三日

講直史魚〔論語衛靈公〕 ○柏木〔文右衛門〕身分伺之儀有之 ○有吉家会

廿四日

當番、山口先生〔仁九郎〕夕通達之品有之、義殺ノコト也 ○如例

二丸御詩会、至暮

夕番、有吉家会

廿九日

廿五日

郊外呉淞園也、以後ハ茶屋番池田礼助〔江懸合〕、借り可申

趣二、加々山〔雅也〕丹右衛門殿〔彌之〕相談仕置候事 ○御船賢貞

江〔平之進也〕中津海同道、礼二罷越、圍棋至夜分

並、夜大塚七右衛門宅、益田源七〔時習館句読師〕圍棋

晦

九月〔安政二年〕

廿六日

二丸出 ○小笠原民部南行会断申来 ○宿元ニて礼經と

もしらへ

朔日

在宿、平山貞五郎至

二日

廿七日

並

出勤

三日

廿八日

夕番

並

四日

並、溝口家今借候義疏五冊返ス、持參 ○先々月廿七八日後、イキリス十二艘・フランス四艘、長崎湊外江泊候處、近日イキリス總督四艘にて入来、十二艘ハやかて出帆いたし候由、フランスハ其保居候由

五日

宅詩会、八ツ後、小笠原家会、夜伴

六日

二丸、甲佐御出ニ付御休会、講堂文会

御政務之儀 御代々様之 思召を被為繼、毎々御世話被為在候得共、年久敷昌平之化ニ浴シ、人心免角外見虚飾ニ相流、万端御手重ニ成行、無益之手数而已相増、御実備之處、往々御安心不被遊、殊ニ近来諸夷引續致入津、夫々御處置之品も有之候得共、後年別而非常之御手當肝要之儀ニ付、此度諸事格別簡易之御制度ニ被為復、惣而無益之旧習手重之古格を被為省、質素之士風ニ相成候様

被遊度との 思召ニ付、追々被 仰出品も可有之候、因

而御一同右之 思召ニ基き、萬端厚申合、聊等閑之心得無之様、精々忠勤を可被勵候

右卯當八月 公義今被仰渡写、藤本扣を借る

七日

當番、並之通

○二丸、(澄之助 寛五郎)二公子去ル五日今甲佐御築江

被為入、御漁之鱒十七被下置候段、御附役今差越來候之由、(多茂)家内今為知候ニ付、引懸ケ二丸江御禮ニ出ル

八日

講釈、(孝子 萬草亭 上カ)伊尹章、夕方有吉会 ○夜(講村 弟)小太郎、沼山津在

今至ル

九日

佳節、(講村 弟)小太郎帰ル、昼後郊外龜井江遊、小柄ヲ落ス

十日

宅詩会

十一日

如並

十二日

信十郎〔辨村子〕、来助同道、菊池〔江〕行

十三日

先ル〔マコ〕六日二丸御會御延引ニ相成居を今日被成候ニ付、出方いたす ○ 毎月廿四日之御詩會を廿三日ニ可被成との事ニ付、於講堂夕番申談〔繼替〕

十四日

小者出候而御寺参拜不仕、外並之通、夕番、〔句讀世話役〕国友半右衛門吊儀

十五日

塾中書寫

十六日

二丸、小笠原 ○ 二丸御詩会、廿四日ニ候處、元之通廿三日ニ御日替也、夕方塾生諸富〔宗潤〕・古庄〔鶴喜〕・黒田〔三作〕・山本〔永喜〕を連、一夜塘看月〔いちやとらむ〕

十七日

加々〔權内〕山文会、返勤罷越 ○ 山本永喜事ニ付、〔辨村塾生〕原田十次郎江相談、暫彼方江呼取留置 ○ 黒石原、御茸狩  
朝出集會、外並之通

十九日

並之通 ○ 德太郎〔辨村弟〕分紙面遣シ候 ○ 講堂詩会、並之通

廿日

夕番 ○安井(息軒)・塩谷(若陰)江疑問、藏人殿(溝口)・堀内久(若殿附)右衛門・北野(中小姓)

隆右衛門江状認、水津(兼太郎)迄頼(露方)新太郎江八留守江頼遣ス

水戸前中納言殿(徳川齊昭)

海岸防禦筋并御軍制御改正等之儀ニ付、近比者月に三

度御登 城被在候處、此度御政務筋之儀ニ付、改而被

仰出候趣も有之、就而ハ彼是御相談之儀も可有之候

間、御老躰之儀、御苦勞ニハ被 思召候得共、以後ハ

隔日御登 城被成候様被 仰出候

八月十五日

廿一日

當番

則条約書三通写相渡申候  
一、長崎奉行川村(修就)對馬守也

廿二日

當番

去ル何日(正弘)阿下伊勢守様(正弘)薩州御留守居御呼出、御封書ニ

て御渡ニ相成、御通達ニ付而、

若殿様江被奉入御覽候ニ、アメリカカ海測量願出候得

共、是ハ如何程ニ申出候共、決而被差免候段、申渡候

筈ニ付、其末種々煩敷筋ニ至り争端を開候場合とも相

成候間、弥以此上共ニ防禦筋、屹ト嚴重ニ・・・・

先役下田(郡榮峰重)奉行ニ而

アメリカカ・魯・英追々渡来一条ニ付而ハ、夫々京都所司

代江申遣置候へども、於

禁裏被遊

御心遣候御様子ニ付、其方儀ハ外国事情委細熟知ニ付、

此度上京候上、不被得已御所置と成(モトマ)を之様申達、所司

代(藤司政通)關白殿へ申上候様、若模様次第ニハ不苦候ハ、其

方江も同道罷出、委細被申上、御都合宜敷様可被取計候、

則条約書三通写相渡申候

一、長崎奉行川村(修就)對馬守也

廿三日

出勤後、二丸御詩会

廿四日

暇日、頼母殿調練〔有吉〕

御覽、見物ニ罷越、七ツ比濟、引取

廿五日

文會、日涉園、山口先生同道引取之節、加々尾宅〔江〕罷越

居候處、宿元今人立、隈下龜助紙面持參、徳七廿二日今

大病、町野を迎度頼来候ニ付、町〔玄慮〕の申談候處、指支候ニ

付、町〔玄慮〕の同道、田中〔再春〕司馬相談、暮過今打立ニ成候、此夜

雨

去ル廿四日調練誓約書

押大鼓 道押 但旗ヲ加レハ其手く道押、本陣計

り道押頭付、道を早ムルにハ破大鼓

刻大鼓 四豎

貝捧音 五横 破大鼓 備押 黄旗貝捧音 後

調貝片旗〔右ハ、左ハ〕横

貝鉦止 鉦引 但旗ヲ加レハ其手く引、本陣計

り頭付、士計り之引ハ、其手く、

鉦を早ムル時ハ早ク引

鉦大鼓旗 横ニ寄 但何れノ旗ニても左を振時ハ、其

手を左ニ寄ス、右ニ振ルトキハ右

ニ寄ル

四旗五手ケ

但時宜ニ寄、白色之旗を諸手ニ付

置事も有べし、其時ハはた受、始

捧音 旗なし操打

急大鼓 士懸り 貝大鼓 救ヒ

但寄大コ計リハ士計リノ救ひ、寄貝計り之時ハ長柄

計ノ救ひ

刻大鼓 居り敷キ立

揚貝 外ニ拍子木有事、長けれハ畧ス

廿六日

二丸御會、小笠原家會、此日近藤左助・萱嶋九馬雄入門、

原佃出府



廿七日

並、出勤、〔元調導〕栃原五郎助七回忌、〔熊太郎〕水津同道、墓參 ○〔再春節師役〕田中司馬、

暮過、千田夕婦二付、相尋、〔腰部〕徳七容躰二便とも二少々通氣付候而、引取候趣

廿八日

講釈、〔多喜次〕辛嶋帰り後、〔左助カ〕寺尾・〔武源太カ〕上野来、〔助之進〕櫛原宅ニ茶吞ニ罷越、〔熊喜〕漆潭旧門生大岩・〔歌助〕石光・池田・坂田・古賀・〔栃原〕其外助之進親類出府仕居

廿九日

夕番、朝言行録卒業連中申談、跡會程傳ニ極ル、有吉直熊〔頼母 嗣子〕方頭瘡二付、會断申来候 ○〔五番組備頭〕藪三左衛門殿調練 御覽

晦日

並、〔門生〕谷口萬次事二付、留守居近藤八兵衛〔江内〕内話申聞

〔安政二年〕  
十月

朔

千田江下人ヲ立ツル、為見舞也 ○日本史書写 ○夜二入小者帰、龜助返書持參、〔兩部徳七〕病人容躰不佳趣なり

二日

並、出勤、御直書写并御用番御書附御儉約御稜書拜見

三日

並、夕方、〔時習館調導〕辛嶋多喜次見へ候而、追々議論之諸扣見セ候様との事二付、〔讓義校時習館編録〕輯録遣ス

○夜分ニ成限〔元龍平手水徳庄屋〕徳七儀、今日五ツ時病死之段、為知来候

四日

暇日申談、早朝夕千田江罷越、葬式暮比相濟、止宿

五日

飯後夕罷帰、八ツ過着

一、昨四日、〔元時習館助教〕柏木文右衛門御穿鑿頭二、〔元開取次〕澤村宮門助教二  
轉役被仰付、今日兩所二罷越候

六日

〔釋村從兄弟之〕平山源作家内病死之段申來候 ○二丸御差合二而明日

二御替、夜塾中詩經會始

七日

朝、鎌田・寺尾・上野・松崎列、易傳會始 ○二丸御會

○〔平之進力〕中津海・平川列、中庸會興業 ○〔宮門〕沢村助教御断之内意

差出候段、為知有之

利根川泥龜先祖附之内

大友二十代、左衛門督義鎮入道宗麟二男利根川常陸介親

家人入道道孝、豊前門司居城後、同国富尾、又同国鞍掛二

移ル、兄左衛門督義統、為秀吉公没取領内候節、道孝率

浪、常州利根江罷越、其後大坂籠城後毛利家江罷越、蜂

須賀蓬庵〔家政〕江も參居、慶長十四年 〔細川忠興〕三齋様御代豊前被召、

三十人扶持、外二現米百石為鼻紙代被下置、於肥後寛永

十九年没

二代松野織部、道孝嫡子也、蜂須賀蓬庵〔細川忠興〕様江罷越居處、

御所望二て於豊前、慶長十七年五百石被下、〔細川忠興〕妙解公御

代寛永元加増三百石御番頭、御入國之刻式百石御加増、

正保四年没

三代松野龜右衛門、於豊前新知百五ツ石、御兎小姓 御

前不宜被召上、有馬陣之節、御跡を慕罷越、御帰陣之

上、為御褒美新知五百石被下置、親織部死去二付而、跡

目之御知行千石之内、龜右衛門弟善右衛門二式百石被下、

跡目八百石先知五百石都合千三百石龜右衛門江被下、三

拾挺頭、御番頭

四代松野龜右衛門、実ハ竹内七郎右衛門二男、大組附御

弓二十張頭、御中小姓頭、御番頭

五代松野四郎左衛門、実ハ津川次郎左衛門二男也、御用

人、御加増三百石

六代松野龜右衛門、実ハ平野九郎右衛門五男也、御小姓

頭

七代松野龜右衛門、実ハ片山多門弟也、御小姓頭、御用

人、御留守居大頭、式千石、御家老代

八代松野龜右衛門、実ハ津田三十郎弟也、千五百石二成、

比着座、御留守居御番頭、御番頭

九代松野新右衛門、実ハ田中平右衛門二男也、文化八年

松野龜右衛門養子、文政五年家督、御側御取次、武功家

頂戴、御用人、御番頭、射術師役、嘉永三年隠居被 仰

付、師役ハ其俣座席持懸、安政元八月病死、實名伴貞

○松野ノ姓ハ道孝、京都松野村ニ居候時より名乗ル ○

大友之由緒ニて被 召出候面々之祖先、小田原九郎左衛

門・志賀太郎助・安東新右衛門 ○瀬戸坂之祖、松野右

京亮殿ハ義統之御子ニて、京都江浪人ニて被居候を、

〔細川忠興〕三齋様御代、松野半齋方江呼下可申旨被 仰付、於豊前

國慶長十七年下向、同十月御知行被遣候由

八日

夕番

九日

並、蒙養齋、並之通 ○是法、有吉隱宅〔香港で刊行の月刊雜誌〕ハ遐邇貫珍

十日

當番後、加々山宅詩会〔雜色〕

十一日

朝徳〔辨材弟〕太郎至、並、出勤

十二日

朝米太夫ニ用事有之、出候而直ニ出勤、戸州生〔在の細川潤次郎〕潤次郎至

十三日

御言賞有之候ニ付、講堂獨看止、講尺井口、輕輩同道、〔多喜次〕〔同生正之助之〕〔呈助〕

辛嶋其外ハ隙ニ付、早天〔同生正之助之〕今小山庄之助ヲ連レ、小山村

二筒獵ニ罷越、雨天ニ成、八ツ過帰ル、小谷哲齋来

十四日

大浦<sup>〔弥次右衛門〕</sup>江矢嶋生之事内談 ○夕番 ○去ル二日夜四ツ時

分、江戸大地震、四方ニ火起、両邸無御別条由、未夕委敷ハ不相分候 ○糸田川潤次郎来、実ハ細川ノ由

十五日

終日在家、諸写本等見調

十六日

二丸、小笠原、並之通 ○岡松辰吾三人扶持被下置、御次ニ被召加、御次番之支配被 仰付、今晚於駿<sup>〔医陣岡松〕</sup>甫留守居寮生祝酒、手前も参ル<sup>〔雜村〕</sup>

十七日

加々山宅文會<sup>〔権内〕</sup> ○法念之儀、十月六日ハ例差支候事、今日懸合右之通也 ○戸州生、糸田川潤次郎、実ハ細川也、長崎ニ而ハ酒屋町戸州御用達西川三次郎ニ寓ス、今夜来別

十八日

講釈、加々山<sup>〔権内〕</sup> ○河野俊藏<sup>〔播磨林田審鑑鉄忠〕</sup>門徒姫路西源寺教順并廣瀨門生豊前四日市渡下方策来<sup>〔淡窓〕</sup>

十九日

並之通

廿日

並之通、夕番 ○是法ニ貫珍<sup>〔退藩貫珍〕</sup>類七綴返し、又一冊来 ○町の明日御用<sup>〔安東〕</sup>

廿一日

當番 ○町野御ヒニ被 仰付、夜迄罷越<sup>〔マヤマヤ〕</sup>

廿二日

右同、夕方町野<sup>〔安東〕</sup>江罷越、城野来宿<sup>〔弥次次〕</sup>

廿三日

出勤、二丸御延引、明日今在郷江參候筈二付、廿六日之儀、  
為願御附役江申入

縁家内吊儀迄、不快達兼而塾生江頼置

廿八日

右同

廿四日

暇日、家内召連菊池江罷越、上下八人暮比着 ○明日郊  
外詩文会之處、上文北行之儀、家内子供久敷振ニ在候而  
多人數二付、自分難相離趣等、山口先生江も及内意、会  
業之儀ハ仕残有之候分ハ、跡以手入可仕段、加々山江も  
申談候而參候事、并廿八日講尺ハ井口江頼候事

廿九日

右同

廿五日

旧村社日、暇日

朔日

在家、刪詩文、小城生橋本新九郎・園田半十郎入門 ○  
塾生布田在江兔狩ニ罷越、二宿候而帰る、中原為彦不快、  
途中ニ滞、追而帰る

廿六日

在舊家、暇日

二も同様

廿七日

十一月二日

出勤、塾生布田分婦、中原為彦不快にて後れ帰る

実母十七回忌、家内共々敷ノ内江参る

三日

講釈、山口先生代勤

當番

七日

四日

明日御連枝様方講堂ニ被為入、音楽被成御間候事ニ付

講釈、問友章、早引、有吉家會讀、尤昨日附役之者参

申談 ○肥前深堀峰為之助来学

候事

五日

五ツ前出、五ツ半時之御供揃にて、二公子講堂江被為入、尾藤健之助相門中音楽御覽、四曲相濟候上御中入、

早出、講藝齋会引後加々山約束ニ而、山中平左衛門招ニ

其後三曲并御望一曲、七ツ比相濟候、講堂諸生獨看八休

行、夜遅ク帰る

廢不仕姿にて、諸生八両座ニ而聽候事 ○安田市助招ニ

十日

付、井口同道、七ツ過分罷越 ○小笠原家会断

宅詩会、尤去ル五日之代日打混候事

六日

雨、二丸出、御会、今日分御廣敷衆出ル ○高橋弥四郎

講堂会后直ニ加々山同道、二丸江出、二公子御詩会

十一日

十二日

二丸、小笠原

昨日是法有吉殿隱宅今鯉魚被贈二付、為礼早朝罷越、出勤

〔十七日条無し〕

十三日

十八日

〔元朝取次〕澤村宮門助教被仰付候處、御断本達ニ相成居、被成御免

並

候段、昨日見へ候而為知ニ相成候二付、早朝罷越、出勤

夕番、夜三村傳之助止宿〔鯉手水惣庄屋〕

十九日

去ル十一日福島龜之允荒尾ニ所替、渡下才右衛門河〔元野尻手水惣庄屋〕

並 ○町野玄肅二女、土屋立仙〔次医師〕江婚礼仕候二付、罷越

原江轉、田代武十郎野尻御惣庄屋被仰付候由

廿日

十四日

並、木下丑三郎〔釋村弟〕、御用有ニて、西徳五郎〔釋村從弟〕同道出府

御寺参拜

廿一日

十五日

並、丑三郎〔釋村弟〕儀、武藝数々相傳いたし居候二付、御手當一番手被給、同列無役之口ニ被附置候段、此夕帰る

在宿、周礼見込書草書

十六日

廿二日

廿三日

二公子講堂〔澄之助寛五郎〕被為入、諸生会讀御覽、日會藤本十右衛門〔句讀世話役カ〕

並

廿八日

門會頭ニて、西廡ニて仕候 ○周礼義解、今日迄ニ差出候様、山口先生〔仁九郎〕分申来候得共、日延申出ル ○夕方二丸御詩会

廿九日

並、夕番、有吉〔頼母嗣子〕直熊方会、石井一同別段料理出ル、夜遅

廿四日

夕番

卅日

並

廿五日

春松閣詩文会 ○氏神祭り、鍔三郎紐解御礼ニ、町野・水津・高橋弥平・成田梶郎呼フ〔禰村子哲三郎〕

十二月〔安政二年〕

朔

在宿、作相州仕出状、報高橋篤次書〔門生〕

廿六日

二丸、小笠原

二日

廿七日

周礼調人職解義、今朝山口先生〔仁九郎〕江出ス、持参

並



三日

並

四日

今日ヨリ暮調取懸り、七ツ後、井口〔皇助〕・佐村同道、松崎〔九郎平〕  
 案内ニ參ル、辛嶋〔時習館訓導〕多喜次方、肥前田中席六郎參り居、私  
 宅ニモ參候心組ニ付、辛嶋〔多喜次〕今申聞置、手前夕方參りくれ  
 候様との儀ニ付、井口〔皇助〕列江も申談、松崎〔目付〕九郎平方今直ニ  
 罷越、井口〔皇助〕・佐村・田中江、応接之模様、醉躰ニ類し、主  
 人同様心配いたし候、八ツ比後レテ引取候

五日

加々山宅詩会中、辛嶋〔多喜次〕今手紙遣候ニ付、直熊〔有吉〕方会讀打廻  
 り候上罷越、前日之儀咄合有之、直ニ井口〔皇助〕方江罷越、内  
 分咄合之儀有之 ○徳太郎出府、丑三郎同様〔釋村弟〕

六日

澄〔細川齊藤三男、後継久〕之助様御感冒ニ付御休会、学校出勤、年末調

七日

出勤、年末調 ○辛嶋〔多喜次〕方ニ而之事、夫々相濟 ○木下初太〔南関手水惣庄屋〕  
 郎至

八日

調

九日

右同、兩日寒強、雨雪、小山門喜殿〔奉行〕・蒲池太郎八等、寒  
 見舞

十日

御家老衆寒見舞、講堂今加々山宅江罷越〔權内〕

十一日

辛嶋〔時習館訓導〕多喜次御用本役被仰付候 ○調一通り濟ム  
 去ル 日、宮川一件、御裁許有之、權次〔宮田〕郎様子未夕分り  
 不申候

十二日

江戸ヨリ塩屋(谷)甲蔵桜田備前町林百助様長屋今、十一月

五日之状(広間取次)田代雄次郎今、十月廿三日之状(中小姓)北野隆右衛門今、

安井仲平十月廿四日之状(息軒)北野今、皆々相達、地震何レも

怪我ハ無之、仲平(安井)ハ半損、塩谷(谷陰)ハ大損轉居也、二人とも二

此間遣置候義殺一件之案ニ銘々見込書附来ル、并ニ愚見符

合いたし、安心いたし候、仲平(安井)ハ裏ニ番町也、田代雄次郎

書も杵山理兵衛(側取次)今達し候、平安也

十三日

夕番、有吉家会断り来ル、夜徳(礼八)永禮至 ○宮川一件被仰

渡、水津(無大郎)ヨリ差越ス

十四日

夕番、福島大太郎(門生)、古川雄次、夜至

十五日

在宿、作報安井(息軒)・塩谷書(谷陰)、片山(登三郎)江も仕出ス、木倉桂八今

田代(雄次郎)江之一封も仕出ス、飛脚立ハ未相聞、認置也

十六日

雪、明日学校御入之儀、山口先生今達来、同役并諸生江

昨夜通達、二丸出、孟子御終會 ○講堂江出、昨晚 御

入之儀、山口先生今達ニ相成、同役江通達之内、加々山

江明日と書候、辛嶋(多喜次)・井口(星助)迄も其心得にて、井口ハ在郷

江行居候ニ、人立申候由、氣之毒也

十七日

六ツ半比出、五ツ半時之御供揃ニ被為 入、河喜多久左

衛門・妹尾佐七左衛門・上田久兵衛、講釋、其外ハ句讀、

習書也、八ツ前御帰座 ○夕、犬塚伊之助(高橋手永徳庄屋)来、上村事、

間違也

今日、千田二人ヲ遣ス、平安也 ○首藤乙熊居寮(門生)

十八日

御書物完上後、二丸御詩會、加々山(羅内)一同出、拜領もの仕

候、塾中終會

廿四日

学校出、手数相仕舞

十九日

早出、年末しらへ ○拝借、轉借等之書、無間違完納

廿五日

在宿、草稿類見仕舞、杉森帰郷、大矢野・古閑至

廿日

右同、達物三通、山口翁〔仁九郎〕江呈ス

小太郎儀、能登守様御貸人之面々、西洋炮術稽古引廻被仰付候段、知七来り候、丑三郎〔禰村弟〕今人馬出ス ○千田分財

廿一日

小笠原家・有吉家終會 ○夜渡〔野尻手水惣庄屋〕子八郎・犬塚伊之助至

廿六日

在宿

廿二日

友成悦 ○上村〔彦次郎〕江罷越内話仕ル、夜前渡〔津内〕列咄合之末也、

廿七日

同様、草稿引直等

阿蘓郷学之事、間違候而、其譯合委敷及噂候事

廿三日

栃原老母〔助之進〕種物出来候而見舞、助之進〔栃原〕医者之相談仕ル

廿八日

是法隱宅江罷越、遐邇〔香港で刊行の月刊雑誌〕貫珍一冊返ス〔有志〕千八百五十四年第十號下アルモノ也

廿九日

在宿、年仕舞如常、塾生越年橋本新九郎・益田新五郎・  
首藤俊藏・園田半十郎・峰為之允・中西卓次・小山庄之  
助・中村四郎、都合八人、草野平藏・深水百次・成田梶  
郎来、守歳作詩